2026_1104「小さなミカンの苗木に、たくさんの実！」日々の理科 4469 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

ホームセンターの園芸売り場で、思わず足を止めてしまいました。高さわずか 50cm ほどの小さなミカンの苗木に、いくつもの立派な果実がついているのです。まだ緑色の実もあれば、黄色く色づき始めた実もあります。こんなに小さな鉢植えなのに、どうしてこれほどたくさんの実をつけられるのでしょうか。つい購入したくなりますが、実際に買って育ててみると、翌年には実がならないどころか、花さえ咲かないこともあります。これは一体、どんな仕組みなのでしょう。

実は、こうした実付きの果樹苗には、いくつかの園芸技術が使われています。まず重要なのが「接ぎ木」です。すでに開花・結実できる成熟した樹から枝を採り、台木に接ぐことで、樹全体が小さくても実をつけることができます。さらに、小さな鉢で根の成長を制限したり、剪定や施肥によって枝葉の伸長を調節したりして、結実しやすい状態に仕立てます。つまり、樹の大きさと、実をつける能力は必ずしも一致しないのです。



では、なぜ翌年には花が咲かなくなるのでしょうか。小さな樹に多数の果実をつけると、光合成でつくられた養分が果実の成長に大量に使われ、翌年の花芽形成が抑えられることがあります。これはミカンの「隔年結果」にも関係する現象です。また、大きな鉢に植え替えると、今度は根や枝葉の成長が旺盛になり、開花が抑えられる場合もあります。小さな鉢に鈴なりのミカンは、園芸技術の成果であると同時に、植物の「栄養成長」と「生殖成長」の微妙なバランスを教えてくれる、興味深い教材でもあるのです。

2026 年 11 月上旬

埼玉県小川町